

---

# とある雨の日

阪野隆平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
とある雨の日

【Nコード】  
N8741K

【作者名】  
阪野隆平

【あらすじ】  
三月のある日。突然降ってきた大粒の雨が心を濡らしてく

外に出ると雨が降っていた。

まだ寒さの残る三月の雨の日。

朝からポツポツと降っていた雨は冬の寒さを含んでいて、せつかくの春の到来が遠ざかったような気分だ。

心無しか、開きかけていた桜の蕾も再び閉じこもってしまったような気がする。

冷えた手を温めるため手に吐息を吹きかけると、白い息が出て驚いた。数日ぶりに見た白い吐息に、今度は白い溜息を吐く。

春にはまだまだ遠い。

冬は嫌いだ。嫌いな理由は単純、寒いからだ。寒がりの人間に、これ以上の理由が必要だろうか？

春や夏は好きだ。秋も、まあ寒くなければ過ごしやすい。だが冬は嫌いだ。子どもの頃から、ずっと。

ああ、忘れていた。

傘を傘置きから取り出して思う。

雨も嫌いだった。

雨という天気は、好き嫌いがはっきり分かれる天気だと思う。

屋内にいるときは、雨音が樹や地面を打つ音がリズムカルで、自然と安心することができる。

しかし外になると話は別。

ビチャビチャになった地面は当然、傘を差していても横から入っ

てくる水滴は天からの嫌がらせだ。服は濡れるし、髪も湿ってしまった。せつかくのセットが乱れる。

やっぱり晴れた。季節は夏で天気は晴れ。それが一番。

だが現実にはなにも起こらない。

雨の止む気配なし。

肩を落とす。

学校から駅までの距離は約二キロ。

その間、どれくらい濡れてしまうだろう。

今から気分が暗くなる。

空を睨んだ。雨が止むと思えなかったが。

案の定、駅に着いたときには悲惨な状態だった。傘を差していたから、ずぶ濡れにこそならなかった。しかし、服は所々湿り、履き慣れた靴は雨水を吸いこんで、靴下まで水浸しだった。

最悪だ。

ポケットにある携帯電話が震えた。一通の受信メールが届く。送信者の名前をみて、口元がほころぶ。しかしメールの文面を読みすすめていくうち、読む前よりも気分が落ち込んでいった。

「ちくしょう」

思った言葉がそのまま口から零れていた。視界が滲み、画面に水滴が落ちる。

それはおそらく。

電車に乗って帰路につく。顔は俯けたまま、周りと目を合わせな

いよう、それだけに神経を集中させていた。  
まともな電車内の記憶はそれだけ。

今日是最悪の日だ。第一志望の高校に落ちたとき並に最悪だ。  
なにが、なにがっ……………！

それ以上は考えないようにした。そうしなければ電車の中でも雨が降りそうだった。

視界同様、電車の窓ガラスも曇り、外の様子がわかりにくかった。

やっぱり雨の日は最悪だ。

気づくと、いつの間にか駅に降りていた。しかも一駅早い。  
なぜ？ と自分に問いかけても返ってこない。

今日はとことん厄日のようだ。

追い打ちをかけるように冷たい北風が通り過ぎる。水分を多量に含んだ風は、全身を震わせるのに充分だった。

やっぱり冬の寒さは大嫌いだ。

右手に持つ傘の柄と左手の中にある携帯を握りしめる。軋む音が両手から聞こえた気がした。

幸い、歩いて帰れない距離ではない。その分、雨に身を打たれる時間が長くなるが。

心の中では言葉にならない感情が渦巻いたが、俯けていた顔を上げた。

もう、いいや……。

毒を食らわば皿まで。なるようになれ、だ。

開き直る気持ちで駅を出た。

どうせ濡れているのだ。これ以上、濡れても足が疲れても大した違いはない。

駅を出ると、相変わらず春とは思えない空気と風だった。冗談抜きで冬に逆戻りした気分だ。

一足早く咲いた梅が不憫でならない。花びらが冷たい雨に打たれて萎びてきている。

傘を持っていないほうの腕を大きく振って早足で歩くが、普段運動をしていないせいすぐに息が上がる。しかも傘も差しているため、いつも以上に動きづらい。絶えず口から息が吐き出されているのが見える。

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう……！

心の中で黒い悪態を吐き続ける。

一滴の雨が頬を伝う。その雨が地面に落ちたと同時に、

歩みを止めていた。

なぜかは……わかっていた。

わかっていたが……再び歩きだす事ができない。

どうすれば再び進めるかが、わからなかった。

雨粒を防いでいた傘が手から離れる。傘が地面を転がる。

「なに……してるんだろ……」

ようやく出てきた言葉は、それだけだった。あとの言葉が続かない。

まともな声はなくなり、押さえつけるような響きに雨音に埋もれ

るように聞こえる。しかし次第に、閑静な道に聞こえてくるのは、悲しげな雨音だけだった。

どれほど時間が経っただろう。

いつの間にか、雨音が耳に入ってこなくなった。周りを見渡す。

先ほどまでと変わらない、湿った空間だ。しかし何かが違った。気温も低いままだったが、それでも何かが違う。

そうだ。

雨が止んでいた。

鬱陶しくて仕方のなかった雨が降り止んでいたのだ。なぜ、と聞くのは野暮なことだろう。天気とは気まぐれで数学のようにはいかないのだ。

天を見上げる。

変わらない曇り空。それでも、心は晴れたような気持ちになる。すると額に何か、冷たいものが落ちてきた。

まさか、雨？

せつかく止んだと思ったのに、錯覚だったのか？

違った。

天から降ってきたのは、小さな小さな白いもの。

雪だった。

今は三月。三月に降る雪とは、珍しい。季節外れではあったが、

響きは綺麗ではあった。

冬は嫌いだったが雪は好きだった。好き嫌いの線分けが無茶苦茶だったが、子どもの頃、雪が降り積もると寒がりなのに、雪の見たさに、触れたさに外に出たものだ。

雫のような雪は、一歩違えば雨となりそうで、とても儚いものだった。それでも、宙に浮いているときは、たしかに『雪』として存在していた。

少しの気温の違いで消えてしまう雪。

少しの行き違い、すれ違い。

ああ、そうか。

恋は、雪のようなものだ。

少し、ほんの少し違うだけで雨となって、溶けて消えてしまう。その存在が、水泡にへと帰してしまう。とても儚い、すぐに消えてしまうのだ。

もう少し、大切にしていれば。

後悔はなにも生まない。

だけど、それでも……。

携帯電話を取りだし、電話帳からある人物に連絡を入れる。画面が雪の雫で濡れていく。



それでも、

画面を耳に押し当てる。水滴が耳を濡らすのが気にしない。

変えたい！

電話が繋がった　もう一度、最初からやり直そう。

全部を　。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8741k/>

---

とある雨の日

2010年10月21日22時32分発行